池田町指定文化財

鬼ノ釜古墳発掘調査報告書

1977・10

長野県北安曇郡

池田町教育委員会

序

池田町には、かって古墳が分布していたが、長い歴史のなかで破壊され姿を消している。

堀之内塚穴は、鬼の釜とよばれる円墳であるが、数少ない古墳として町の歴史上貴重な存在となっている。

昭和４５年４月、池田町史跡として指定を受け保護されてきたが、横穴式石室の積石の一部が崩壊しておるため、今度、補修復元事業にあわせて清掃調査をした。

この古墳は、６世紀から７世紀に造られたものと推定されているが、開口された年代が検地帳古文書より推して３００年以上江戸初期以前にさかのぼるため、遺物はすべて散逸し、解明の資料はない。

このたび、短期間ではあるが、清掃調査で前庭部から須恵器甕片、土師器など７世紀前半の古墳と推定される出土品により、築造の時期も明確にされた。

この重要な文化遺産を後世に遺し伝えるため、調査報告書が発刊されるにあたり、県教育委員会、直接調査に当られた先生方、調査に協力された地元関係者に、深甚なる謝意を表する次第であります。

昭和５２年１０月１０日

池田町教育委員会

教育長　島　田　和　美

例　　言

1. 本書は、昭和５２年６月２６日より７月３０日にわたり発掘調査を実施した長野県北安曇郡池田町に所在する鬼ノ釜古墳の調査報告である。

2. 本書の執筆・編集は、臼田武正と花岡　弘がおこなった。

3. 資料整理は、臼田・花岡の他に寺島　仁・市川隆之がおこなった。

4. 挿図・写真図版の作成は、臼田・花岡の他に寺島平八郎がおこなった。

5. 発掘調査にあたっては、薄井孝一氏に御支援を、遺物については、笹沢浩・矢口忠良の両氏に御教示を賜わった。又、玄室を構成する石質及び地質については、畠山順和氏に御骨折り頂いた。ここに御芳名を記して謝意を表したい。

本　文　目　次

序　　文……1
例　　言……2
Ⅰ　発掘調査の経過……4
　1　調査の動機と調査に至る経過……4
　2　発掘日誌……4
Ⅱ　鬼ノ釜古墳をめぐる環境……6
　1　地理的環境……6
　2　考古学的環境……7
　3　地質概要……8
Ⅲ　墳丘と内部構造……9
　1　墳　　丘……9
　2　内部構造……10
　3　石室を構成する岩石……11
Ⅳ　出　土　遺　物……12
　1　遺物の出土状態……12
　2　出土遺物……13
Ⅴ　調査の成果と問題点……16
　　註……17
　　引用参考文献……17

挿　図　目　次

第1図　鬼ノ釜古墳の位置と周辺の遺跡…6
第2図　鬼ノ釜古墳墳丘実測図……9
第3図　鬼ノ釜古墳石室実測図……10
第4図　遺物出土分布図……12
第5図　須恵器の接合関係図……13
第6図　出土遺物実測図(1)……14
第7図　出土遺物実測図(2)……15

図　版　目　次

図版1　1　鬼ノ釜古墳遠望……19
　　2　古墳全景……19
図版2　3　古墳全景……20
　　4　石室入口部……20
図版3　5　石室内部……21
　　6　須恵器出土状態(1)……21
　　7　〃　(2)……21
図版4　8　慰霊鍬入れ式……22
　　9　前庭部の調査……22
　　10　調査の参加者……22

Ⅰ　発掘調査の経過

1. 調査の動機と調査に至る経過

池田町堀ノ内堂山に所在する鬼ノ釜古墳は、昭和４５年４月１日に池田町史跡に保存指定されて現在に至っているが、石室の開口された年代が検地帳古文書より江戸初期以前と推定され長い年月の間に、積み石に緩みが生じてきた。地元の話によると、近年、実際に一番前の天井石がずり落ちてしまい、押し上げたとのことである。現在では特に、東側壁の緩みが著しく、一部は積み石が抜け落ちて空洞化し、自然崩落寸前の極めて危険な状態となっている。

この事態を重視した池田町教育委員会は、昭和５２年６月初め、県教委文化課指導主事、樋口昇一・関孝一両氏の現地指導により、早急に補修復元をし、併せて、古墳の清掃調査を行なうことにした。

調査は、担当者に臼田武正、外調査員３名をもって調査団構成をし、６月２６日～７月３０日までの期間、墳丘の地形測量・石室展開図の作成・石室の清掃発掘・前庭部の発掘・墳丘の地層確認等を内容として実施した。

(1) 調査主体　池田町教育委員会

(2) 調査場所　長野県北安曇郡池田町大字堀ノ内字堂山1867番地　鬼ノ釜古墳

(3) 調査期間　昭和５２年６月２６日～７月３０日

(4) 調査参加者

・調査担当者　臼田武正（池田小学校教諭）

・調 査 員　薄井孝一（堀ノ内地区氏子総代），寺島平八郎（池田町文化財保護委員）花岡　弘（明治大学学生）

・調査協力者　太田実雄（堀ノ内地区），薄井寿男（堀ノ内地区），畠山順和（信州大学学生），高村博文（県考古学会会員），平林富子（池田小学校職員），寺島　仁（大町高校社会科研究クラブ），市川隆之（　〃　），寺島浩徳（　〃　），小野和英（高瀬中学校生徒），真島秀明（　〃　），池田小学校生徒

・調査事務局　島田和美（池田町教育委員会教育長），丸山清雄（池田町公民館副館長）

2 発　掘　日　誌

６月２６日（日）

古墳の墳丘及び周辺の下草刈りと、前庭部の雑木伐採作業をする。石室には実測用基準線の割付けをし、午後は、測量用基準杭を打って、墳丘を中心とした地形測量を行なう。

６月２８日（火）

大町市社字宮本の松井勘治氏にお願いして、慰霊鍬入れ式を、町助役をはじめ教育委員と発関係者１０人の列席を得てとり行なう。

６月２９日（水）

前庭部及び墳丘東側に杭打ちをして、発掘トレンチを設定。地層確認のため、前庭部トレンチ東半分を掘り下げると、表土下１０cmより土師器小片・陶器片が数点出土する。

６月３０日（木）

石室内東側壁の実測を開始する。前庭部は掘り下げを続行、古銭（寛永通宝）・陶器片が出土する。

７月　２日（土）

石室内東側壁の実測と前庭部の掘り下げを続行する。

７月　３日（日）

前庭部と羨道部の掘り下げ作業をすすめる。前庭部東半分の第Ⅳ層から、同一個体とみられる須恵器片が６点出土、羨道部Ⅱ・Ⅲ層からは、陶器片・古銭等が集中して出土する。玄室内の清掃も一部行ない、床面の土をふるいにかけるが、鉄片が１点検出されたにとどまる。

７月　５日（火）

前庭部の抜根作業をし、土層の実測及びセクションベルトの除去をする。前庭部の掘り下げを地山までしたところで、須恵器散布状況を写真撮影する。

７月　９日（土）

羨道部閉塞部分と玄室床面の清掃をする。

７月１０日（日）

羨道部閉塞石の平面実測をし、除去し始める。玄室床面の清掃をし、ふるいがけをするが遺物の検出は認められない。墳丘東側にトレンチをあけ、地層確認をする。地表下からは陶器片が出土、墳丘裾部には、外護列石と思われる配石が認められる。

７月１７日（日）

羨道部から玄室にかけての閉塞石を除去すると、玄門と思われる立石が左右ほぼ対称にあらわれる。閉塞石は、長さ５０～８０cmの自然石を用いて、長軸方向に規則正しく積み込んである。玄室床面の清掃は、入口部床面から人骨の一部と思われる骨粉を検出するが、他の遺物は全く認められない。

７月３０日（土）

玄室・羨道部の床面を再確認して主体部の清掃調査を完了する。羨道閉塞部分の床面より、破砕された状態の須恵器小片が１点出土する。前庭部は発掘トレンチを東側へ１m拡張して、地山まで掘り下げると、第Ⅳ層から、既に検出した須恵器と同一個体と思われる破片が３点出土する。夕方、写真撮影だけを残して現場作業を終了し、器材の撤収を行なう。

Ⅱ　鬼ノ釜古墳をめぐる環境

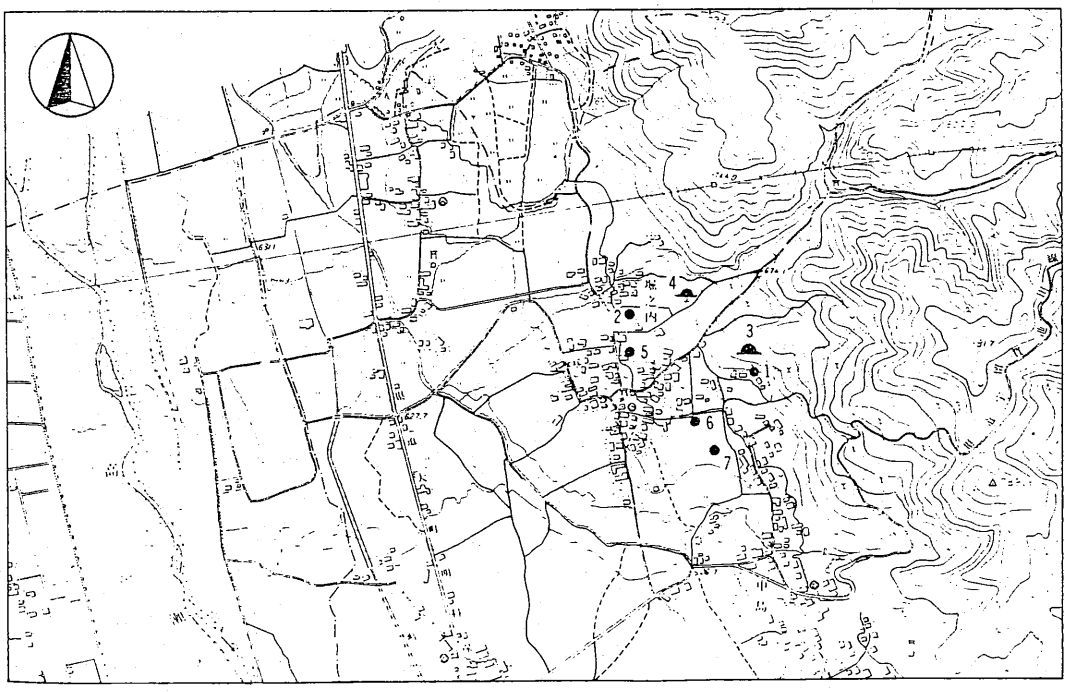
1. 地理的環境

池田町は、安曇平の東縁を画する中山（大穴山）高 849.2 m の西麓を占め、前方には高瀬川が流れている。現在、高瀬川の西方を、大糸線と国道147号線が、そして南方には明科・池田・大町を結ぶ北国脇街道が走っている。

池田町の地形を見ると、山麓地域と水田地域からなっていると言えよう。そして、更にこの水田地域は、自然堤防と後背湿地とに区分される。山手地域は、中山の西斜面、中山の北に続く大峯山（南は花岡山と呼ばれる）の南麓、そして西は大峯山の東麓、北は戸隠山脈の南麓と等高線が密となる広津地区があり、一方、水田地域は、中山の麓下西方に展開しており、旧社村閏田（現、大町市）の下で高瀬川の水をひきあげた用水町川、同じく高瀬川の水を旧社村丹生子でひきあげた新堰がこの中を流れている。

高瀬川の自然堤防上には、南から中の郷・十日市場・内鎌・柏木の各集落や延喜式内社川合神社が位置している。

遺跡の多くは、中山の西麓下に点在しているが、昭和４５年の分布調査（註２）により、更に１０前後の遺跡が自然堤防状微高地において確認されている。



第１図　鬼ノ釜古墳の位置と周辺の遺跡（１：20.000）

2　考古学的環境

池田町においては、今のところ、先土器時代の遺跡は確認されておらず、最も遡るもので縄文時代中期後半（加曾利E期）である。縄文時代の遺跡は、そのほとんどが山麓に位置している。これらのうち、会染地区宮下遺跡から、300点余りの石鏃が採集されていることは特筆すべき事と言える。この宮下遺跡は、時期的には後期（堀ノ内、加曾利B期）とされている。

弥生時代の遺跡数は少なく、4遺跡を数えるに過ぎない。このうち、3遺跡は後期に属すが、確確実に集落址と把握されるものとしては、堀ノ内地区の上の寺遺跡を掲げ得るのみである。自然堤防上に遺跡が見出されないことが、当地における遺跡立地の一つの特徴と言えるのではないだろうか。

古墳時代に入っても前時代の状態は続くようであり、古墳が形成され始めるのも後期に至ってからである。古墳の立地の一つの特徴として、高瀬川に接した微高地上に築造された古墳の存在することが、昭和45年に行なわれた分布調査により確認されている（註3）。又、この地域の古墳が単独墳であり、群集墳を形成していないことも特色と言えよう。なお、古墳と関連視しなければならない集落遺跡は、現時点においては不明確と言わなければならない。前述した、この地域の古墳が単独墳であるという特徴も、今後、集落址の確認・検討からのアプローチが必要と思われる。

弥生・古墳時代に少なかった集落遺跡の数は、しばらくの空白期間は置くものの、平安時代中頃になると急速に増加するようである。遺物は、土師器・須恵器・灰袖陶器などである。

遺跡名	所在地	既出遺物	時代
1塚穴付近	大字堀ノ内1840	石鏃・石匙	縄文
2上の手	大字堀ノ内上の手956	打製石斧・凹石・壺・甕・高杯	縄文・弥生後期
3鬼ノ釜古墳	大字堀ノ内堂山1867	金環・勾玉	古墳
4糠塚古墳	大字堀ノ内糠塚	勾玉・直刀	古墳
5薄井荘介屋敷	大字堀ノ内1130	須恵器甕（破片）	平安
6神の木	大字堀ノ内1237	須恵器甕（破片）	平安
7坂下	大字堀ノ内1557	須恵器甕・土師器杯	平安

第1表　堀ノ内地区の遺跡

次に、鬼ノ釜古墳の所在する堀ノ内地区の遺跡を一瞥してみたい。堀ノ内地区の遺跡の内訳は、第　表に示したように縄文時代2（時期不明）、弥生時代1（後期）、古墳時代2（両者とも古墳）、歴史時代3である。これらのうち、堀ノ内段丘に存在する神の木遺跡を除いた遺跡は、全て花岡山山麓に分布している。前にも述べたように、堀ノ内地区に所在する二基の古墳も集落址との関係は、不明である。今回調査した鬼ノ釜古墳は、花岡山の山ふところで相当の高処にあり、

山腹の斜面を利用して形成されている。なお、鬼ノ釜古墳の南下方に展開する斜面には、塚穴付近遺跡（縄文時代）が存在している。

3. 地　質　概　要

本地域は、大峰山列の西側で、松本盆地の東縁にあたる。盆地周縁部のこのあたりでは、河岸段丘、崩土、崖錐が発達している。

河岸段丘は、高瀬川によって形成されたもので、大町市松崎附近から現河床面との比高最高20 *m*で、南へ向かうにつれ低くなって連続し、池田町半在家附近で不明瞭となっている。この段丘面が大峰面群の中の最下層の面である館之内面で、閏田以南では湖沼性堆積物が段丘を構成しており、その侵食面上に河床礫層をのせている。

古墳のある花岡山附近は、大峰頂からの侵食旺盛な東西方向の短小な河谷である堀之内沢が漏斗状盆地を形成して流れている。標高670 *m*附近に最近作られたテニス場があり、テニス場を作った時に削られた露頭では、湖沼性堆積物が、基盤の3紀層にアバットする形でへばりついているのが観察でき、後期洪積世にこの附近が湖であったことがうかがえる。

この附近の地層は主として中新世後期から鮮新世に渡って堆積したもので、膠結度は低い。花岡山を構成する地層は、この附近に分布する大峰累層と呼ばれるものの中の社凝灰岩礫岩層で、チャートの1～2 *cm*径の円礫を主とする礫層とその上にのる凝灰岩質粘土層によって特徴づけられる。ここの走向はN40°Eで傾斜は26° SEである。

大峰累層は、全層厚1500*m*に及ぶもので下部から上部に向かって、社凝灰岩礫岩部層、日野礫岩砂岩部層、大穴山礫岩部層の3部層に区分される。走向は一般にNS～N30°Eで、傾斜は10°～40° SEであり中山山地中央部を南北に走る大断層、中山断層に向かって単斜構造をなしている。

軟弱な地質の為、附近では地辷りも多く発生しており、防止地域に指定されている。

地質時代			地　層	文化・道具
沖積世			扇状地堆積物	古墳時代 弥生時代　土器 縄文時代　土器
洪積世	後期		段丘及び段丘礫層	ポイント ナイフ モリ先(骨器)
	中期	豊野期	山砂利	ポイント スクレイパー
	前期	猿丸期	大穴山礫岩層	↑ HandAxe
鮮新世	後期			礫器
	前期	柵期	日野礫岩砂岩層	
			社凝灰岩礫岩層	
中新世	後期	小川期		
	中期	青木期		

第2表　地質年代表

Ⅲ　墳丘と内部構造

1. 墳　　丘

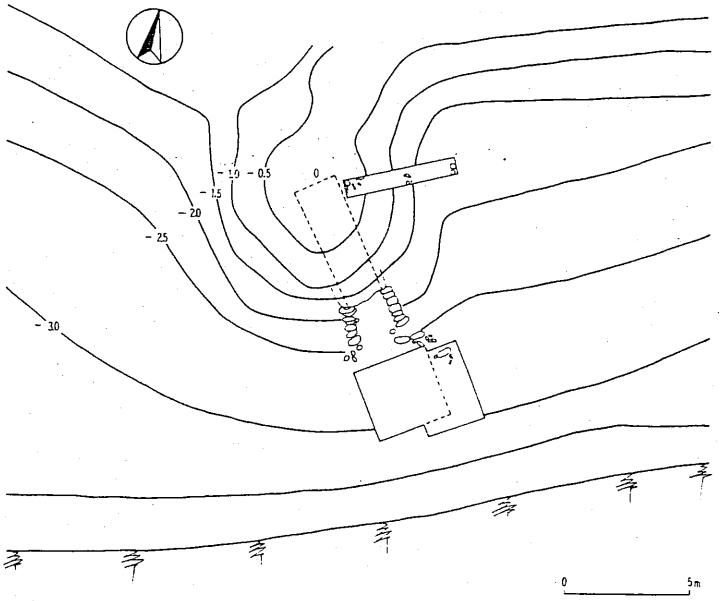
鬼ノ釜古墳は、花岡山（標高 702.0 m）の山懐南斜面の標高 682 mの地点に所在する。墳丘は、東西 12.0 m、南北 11.5 mを計り、現墳高 2.5 mの円墳である。

現在、墳丘上には樹令５０年以上の赤松の大木が４本植生しているが、南前方の樹木を伐採すると、古墳からの眺望は極めてよく、眼下には堀ノ内の一部と中島地区が、遠方には、池田町部さらには会染地区の平坦地が一望される。墳丘の南側は一部緩傾斜の平坦面になっていて、その下方は桑畑となっている。以前、耕作の際に、石垣状の石積が三段確認されたとのことであるが、今回の調査では、再確認して古墳との関連を追求するには至らなかった。

緩傾斜する平坦面は、古墳の前庭部と考えられ、トレンチを設定して調査したところ、東寄りに地表下 45 cmのほぼ同一レベルから、破砕された須恵器の破片が出土したが、石壇、配石等の遺構は検出されなかった。

羨道部両側の墳丘斜面の表土を剝ぐと、西側は 30 cm大の花崗岩の自然石が 10 数個配石されていたが、東側には認められなかった。おそらく、標柱を建てる際に取り除かれてしまったものと思われる。

墳頂から東裾部にかけて設定したトレンチでは、墳頂部と中腹で拳大から人頭大の礫を用いた裏積みが、裾部からは、50 ～ 70 cm大の花崗岩の自然石が認められた。裾部の自然石は、外護列石として墳丘をめぐっているものと推定される。



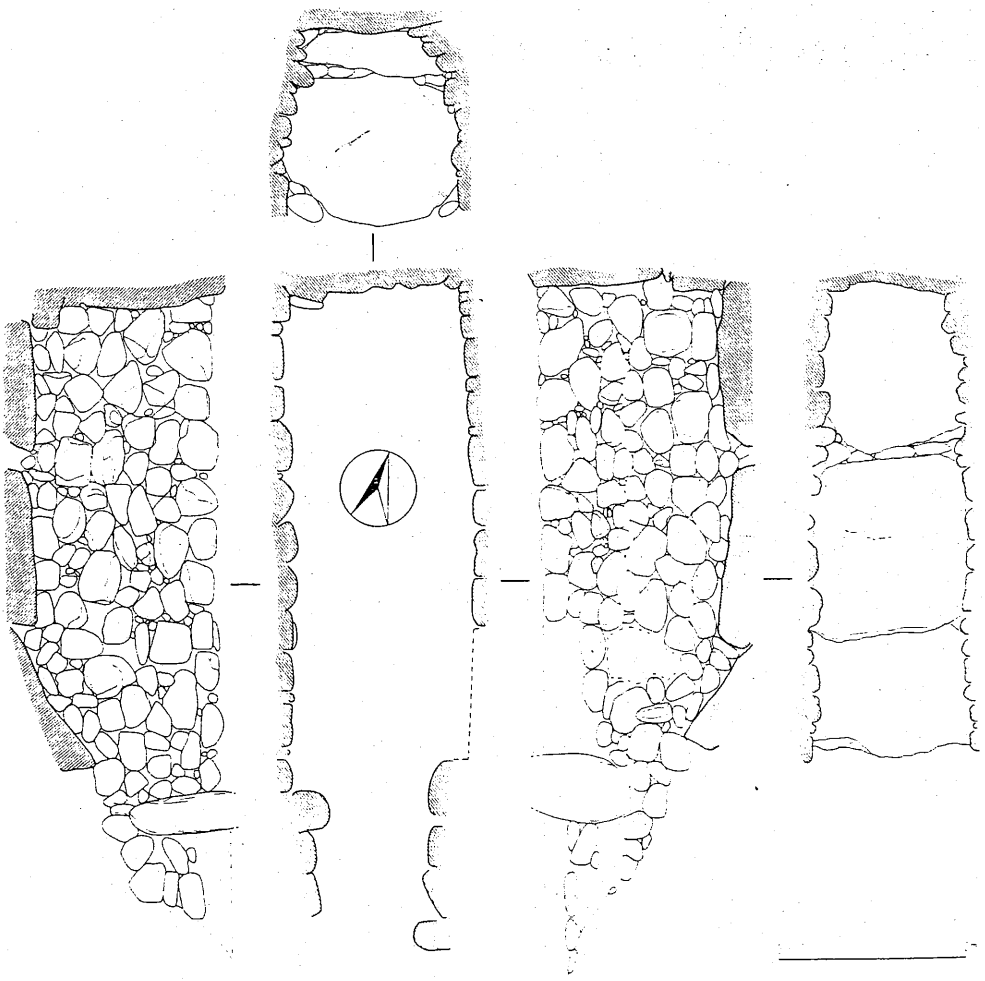
第２図　鬼ノ釜古墳墳丘実測図（１：300）

2 内 部 構 造

主体部は、横穴式石室で南方に開口する。玄門で玄室と羨道に区別されるが、石室プランは長方形で無袖式である。

玄室の規模は、全長5.2 m、奥壁部で幅1.8 m、玄室入口部で幅1.85 mあり、長軸方向はN－18°－W、奥壁は、高さ2.05 m、幅1.8 mで、高さ1.6 mの一枚岩の上に高さ45cmの石を積み上げて、計2枚で構成されている。

側壁は、厚さ30～50 cm、長さ約80cm大の転石がごぼう積状にほぼ7段に乱積みされている。東西壁とも、奥壁部で1.9 m、玄室入口部で1.4 mを計るが、入口部は、以前、天井石がずり落ち修復した際に、積石が崩れ落ち低くなってしまっている。西壁の保存状態はかなり良いが、東壁は、一部壁面が張り出している積石が10数個、玄室床面に崩れ落ちてしまっている積石が7



第3図　鬼ノ釜古墳石室実測図（1：80）

個みられた。なお、壁面の隙間に粘土を塗り込んでいる痕跡が、保存状態のよい西壁で顕著に認められた。

玄室の天井は、幅1.5 m前後、厚さ約50cmの板石が奥壁上から玄門にかけて三枚のせられているが、玄室入口部の天井石だけがかなり前方に傾斜している。これは、以前修復した際に傾いたもので、おそらく三枚ともほぼ水平にのせられていたものであろう。

羨道部は、全長1.8 m、幅1.7 mを計り、側壁は東側の一部が抜きとられてしまっている。両側壁には、玄門の門柱としての立石がややずれてはいるが対称に認められ、東壁のものはそれ自体で側壁を構成している。東壁の立石は高さ1.0 m以上、幅73cm、西壁のものは、高さ1.1 m以上、幅、厚さとも40cmを計る。両立石とも地山に深く埋め込まれ安定している。

羨道部には、厚さ30～40 cm、長さ50～80 cmほどの転石をごぼう積みにして玄室を閉塞していた状態が確認されたが、閉塞部分は、玄門から玄室入口部までに及んでいた。

玄室の床面は、古墳開口以降の盗掘ないしは玄室使用によってであろうか、黄色粘土層の地山が踏み固められ、側壁最下段の積石及び奥壁基部もほとんどが露呈している。玄室入口部は、側壁の崩土や閉塞部の土砂が20～50 cmの厚さで流入堆積しており、精査してみるが、床面上からは人骨と思われる骨粉が少量検出したのみであった。棺床として、床面に小砂利を敷いたり礫を配石するなどの痕跡は、全く認められず、玄室・羨道部とも地山面はほぼ水平であった。

3. 石室を構成する岩石

古墳の石室を構成している主な岩石は、花崗岩、閃緑岩、安山岩の3種類である。

いづれもかなり円磨された円柱状の細長い岩石を用いて組み合わされており、岩石の大きさは一般的には径30～50$^{\phi}$cm×長さ80 cm 位のものが多い。これらの大礫は恐らくは現高瀬川水系の河床礫であって、当時の人々が同じ位の大きさの岩礫を集めては組みあげたものと思われる。

この礫の中で注目されることは、高瀬川上流域の花崗岩類の礫のみでなく、古墳のある堀之内地区の後背地であるところの大峰の大峰型石英安山岩の大礫が使われていることである。大峰型石英安山岩は、紫蘇輝石を含むガラス質の黒雲母安山岩で、中に捕獲岩として花崗岩や古生層の岩片を捕獲する。また球顆および流理構造が見られる溶岩流で、新第3紀の鮮新世後期乃至は猿丸期くらいの噴出物である。

古墳の入り口（玄室への）の門柱にかなり大きなものがひとつ使われている他、玄室壁面にも散点して使われている。

玄室壁面では他に、紅色粗粒黒雲母花崗岩、白色中粒黒雲母花崗岩、花崗閃緑岩、石英閃緑岩、石英斑岩などが使われている。これらは全て高瀬川の上流、北アルプスに起源を発するもので、これらの礫は現河床でも数多く見られるものである。また天井石に使われている大きな板状の岩

石は総べて紅色粗粒黒雲母花崗岩であるが、この天井石は人為的にカッティングされた可能性が大きい。

花崗岩の分類については柴田秀賢（1954）らの分類（註4）を参考にされたい。

以上、古墳に使われている岩石は、この周辺の地質を良く反映したものとなっている。

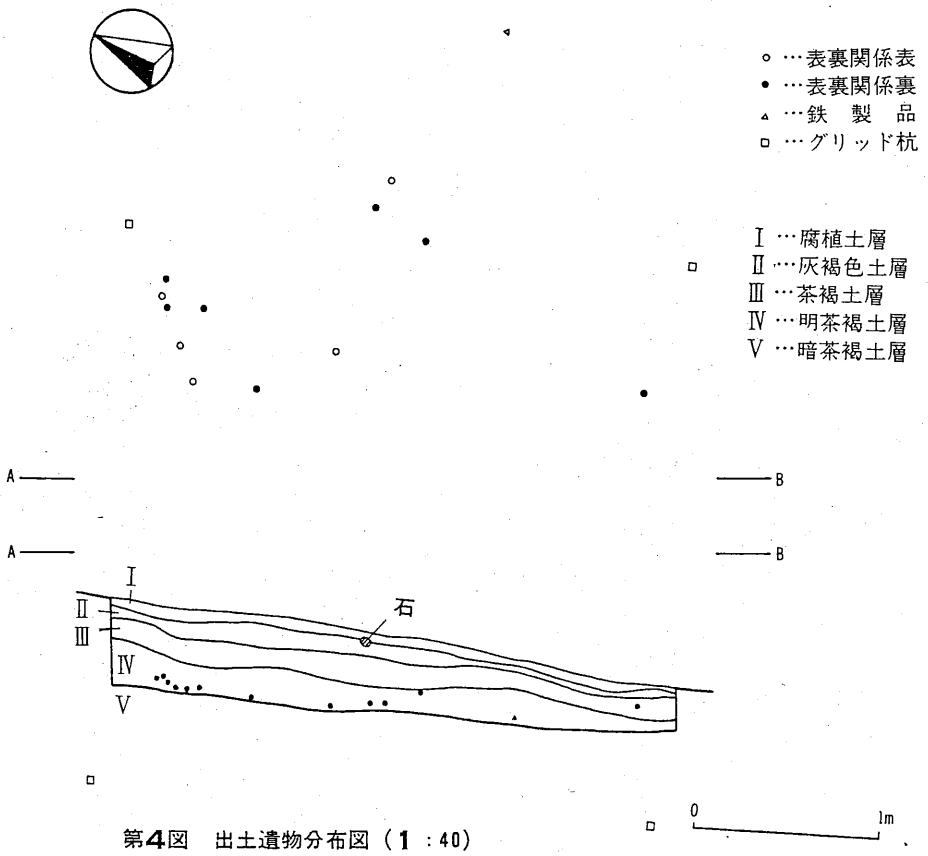
Ⅳ 出 土 遺 物

1. 遺物の出土状態

(1) 羨道部・前庭部

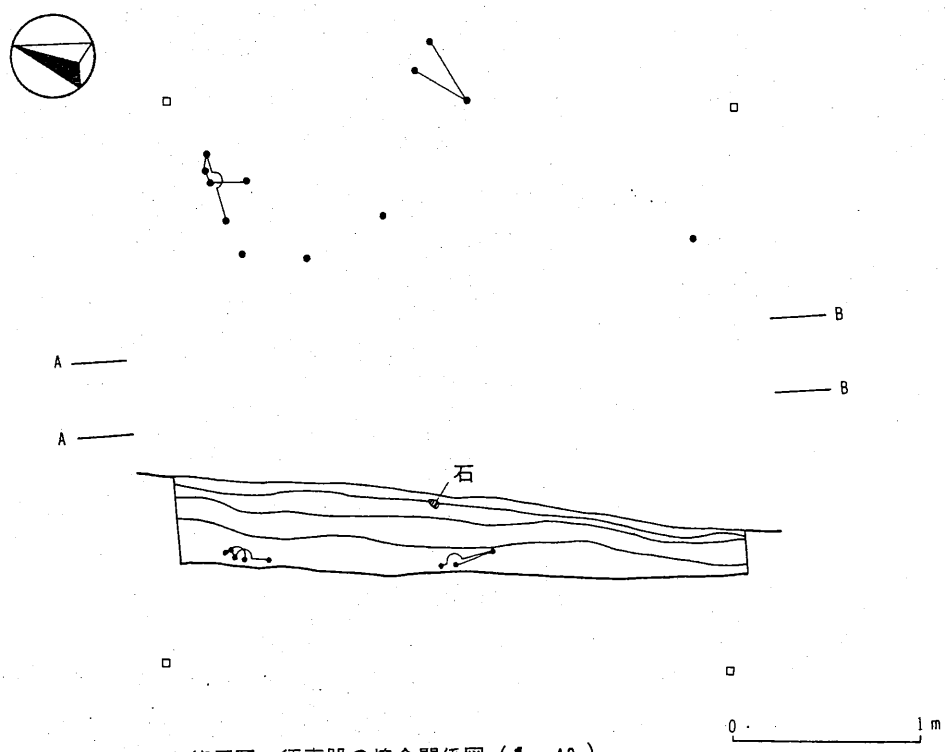
羨道部及び前庭部からは、陶器破片・古銭・須恵器破片・土師器破片・鉄製品が出土した。このうち、陶器破片・古銭は、第Ⅰ・Ⅱ層からの出土がほとんどである。

須恵器の破片は、第4図に示したようにグリッド北東部を中心に出土した。破片は、全部で15片を数え、このうち14片が前庭部から、1片は閉塞石の下から各々出土している。このうち、出土位置について記録を取り得たのは、12片である。表裏関係は12片のうち、表を示すものが5片



第4図　出土遺物分布図（1：40）

（４２％）、裏を示すものが７片（５８％）で裏を示すものがやや多くなっているが、特に顕著な偏在性は認められない。接合関係は、第５図に示すように、二つにグルーピングすることができる。比較的小範囲にまとまって接合しており、接合の距離も最も長いもので40cmである。なお、接合する破片は、いずれも横瓶の破片である。次にこれらの破片を層位的にみると、そのほとんどが第Ⅳ層から出土しており、レベル差も余りないと言える。なお、垂直分布図において１片が第Ⅲ層出土の状態を示しているが、グリッド南東部で認められた攪乱によるものと思われる。この他、第Ⅳ層からは土師器小片・鉄製品が各々１点出土している。



第5図　須恵器の接合関係図（1：40）

(2) 玄　室

玄室内の出土遺物は、図示不可能な鉄片が少量検出したにとどまり、その他の遺物は全く検出されなかった。ただ、玄室入口部攪乱土層から骨粉が少量出土したが、その性格は不明である。

2　出　土　遺　物

前述したように、遺物としては、陶器破片・須恵器破片・土師器小片・鉄製品・古銭が出土している。本項では、須恵器・鉄製品・古銭について一瞥することにしたい。

(1)　須恵器（第７図）

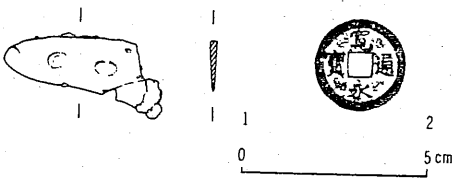
横瓶（第７図１～３・６・７）の破片が多く、部位別にみると、口頸部１片、体部１０片である（註５）。この他、甕の体部の破片と思われるものが２片（第７図４・５）ある。又、表面が剝落して全器形の推測が不可能なものが２片あるが、残存している内面の調整から推して、この２片は前述した２つの器形のいずれかに含まれる可能性が強い。

横瓶は、胎土に砂粒を僅かに含み、色調は内外面とも青灰色を呈している。焼成は良好で口頸部・体部ともに自然釉が認められる。口頸部は外傾し、口縁端部は断面三角形を呈する。口径は、推定で12.6*cm*を計る。次に調整をみると、口頸部は内外面とも横ナデ調整が施されている。体部外面は、平行叩きの後、カキ目調整が行なわれている。内面は、ヘラによるナデ整形である。又、体部内面においては、成形に際しての接合面の指おさえ痕が顕著である。本例の所産の時期は、７世紀前半と考えられる。

甕と思われる破片は、胎土・色調・焼成のいずれも横瓶のそれに近く、自然釉の認められるものが１例存在する。調整は外面が平行叩き、内面はヘラナデとなっている。横瓶と異なっている点は、叩き目の状態と器壁が厚いことである。以上の点の他、出土状態からも推して、その所産期は横瓶の時期と大差ないものと思われる。

(2)　鉄製品（第６図１）

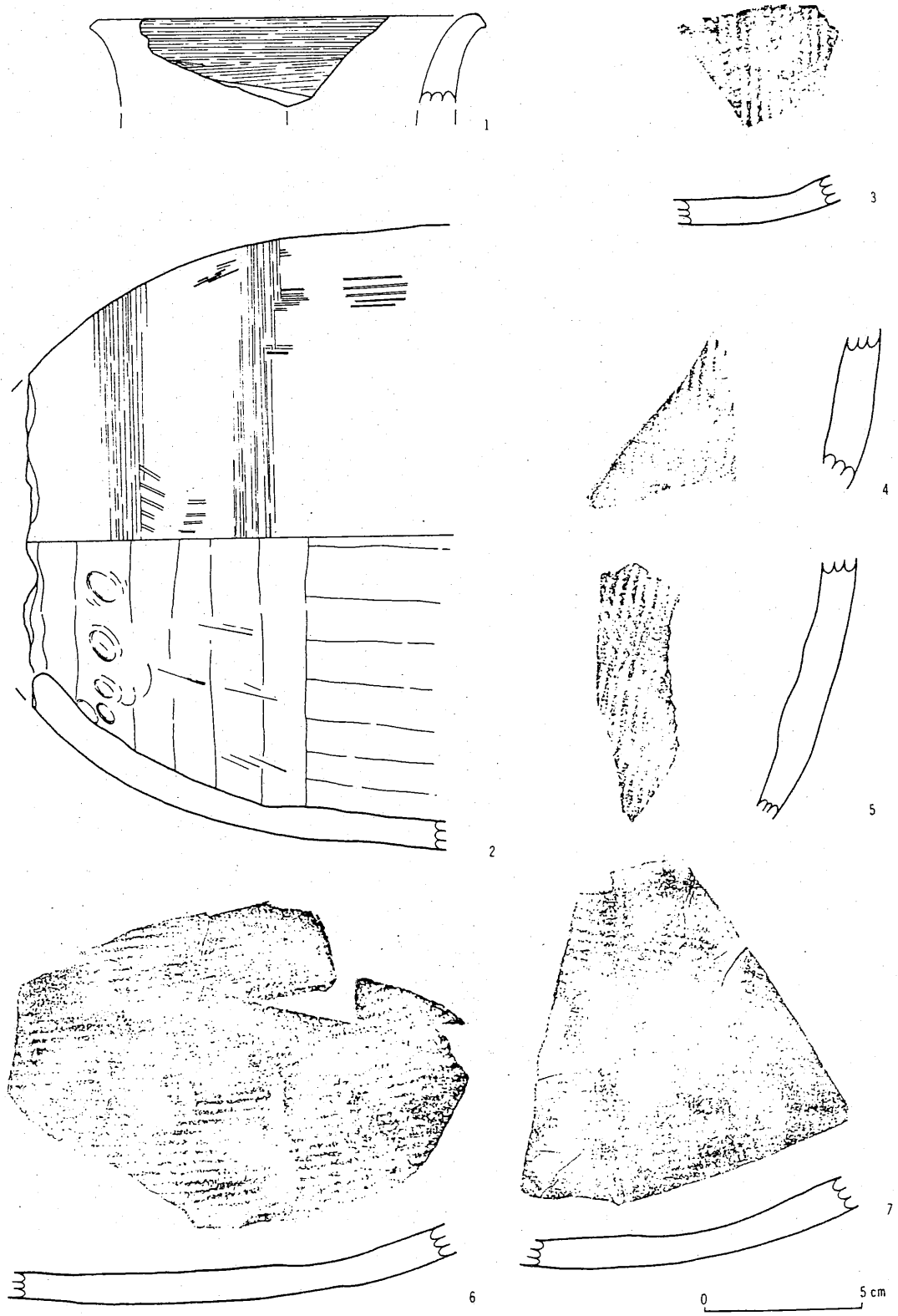
第６図に示したように前庭部から出土した現存の全長は4.3*cm*、幅1.5*cm*を計測し、鎌状に湾曲気味となる。刃部をつけており、利器には違いないが明確には断定できず、或いは、刀子の範疇に入るかもしれない。



第6図　出土遺物実測図（1：2）

(3)　古　銭（第６図２）

古銭は、羨道部・前庭部から出土をみている。羨道部からは、寛永通宝２枚・大正１０年発行の１０銭、前庭部からは、寛永通宝１枚・大正８年発行の１銭がそれぞれ出土した。寛永通宝は前庭部から出土の２枚に緑青が付着していることから、銅銭と思われる。又、前庭部から出土したものは、錆の付着が激しく僅かに「永」の字が判読できるだけであるが、寛永通宝に間違いはないと思われる。これは錆からして鉄銭であろう。銭径は図示した一例が寛永通宝の標準である約2.4*cm*にほぼ同じである。他のものは、2.1*cm*・2.2*cm*とやや縮くなっている。図示したものは、羨道部から出土したもので、他の二例は緑青・錆の付着が大きいため、割愛した。



第7図　出土遺物実測図（1：2）

Ⅴ　調査の成果と問題点

鬼ノ釜古墳の清掃調査の結果、内部構造と構築技法が明確となり、併せて、出土遺物から同古墳の築造年代を推定する手がかりが得られた。すなわち、主体部は横穴式石室で、プランは長方形の無袖式をとり、側壁が自然石の乱積みによって構成されていることなどから、古墳時代後期の所産とみられる。ただし、無袖式ではあるものの玄門が残り、玄室と羨道が区別されることや、墳丘・主体部の規模、山懐に単独して立地することなどからして、終末期には属さないであろう。

古墳に明らかに伴う出土遺物としては、前庭部から須恵器破片が検出されたにとどまり、副葬品としての玉類・鉄製品等は、後世の盗掘により完全に消失していた。地元の人の話によると、昭和３０年代にも玉類が出土したとのことで、既出資料は伝承で鉄刀・金環・勾玉があるが、遺物はすべて散逸してしまい不明である。

前庭部出土の須恵器片は、甕と横瓶の二形態に分類され、破砕された痕跡が認められる。横瓶は器形がほぼ判明でき、整形技法などから７世紀初頭に比定されよう。破砕された状況は、おそらく、墓前における供献的祭祀行為が行なわれたのであろう。

以上のことから、鬼ノ釜古墳の築造年代は７世紀初頭から中葉にかけてのものと推定されるが、大町市社から明科町にかけての高瀬下左岸東山系に分布する古墳の地域編年上の位置づけについては、今後の研究成果を待つことにしたい。

鬼ノ釜古墳の被葬者については、伝承がなく、その人物を特定することは不可能ではあるものの、これだけの古墳を築造するには、相当の政治的経済的基盤をもっていたはずである。その基盤は、古墳から眼下に一望される中島・堀ノ内一帯に想定でき、高瀬川段丘面に集落址が、その下の氾濫原に生産址としての水田地帯が存在していたものと思われる。今後、当地域における古墳時代後期の鬼高期集落址（註６）の究明がなされれば、鬼ノ釜古墳の築造年代も総合的に裏づけられることになるだろう。

また、被葬者を地方有力豪族のひとりとしてとらえるならば、その性格を古氏族の研究からも追究する必要があり、あわせて今後の研究課題としたい。

最後に、本報告書が刊行される頃には、石室の修復工事も完了するものと思われ、墳丘及び周辺の環境整備等についても、所有者の堀ノ内地区と検討し、町民のだれもが同古墳に関心をもち理解を深められるような文化財保存対策をしていきたいものである。

註

1. 『池田の文化財』の鬼ノ釜古墳に関する記述によると、慶安検地帳にはうかがえないが、明暦2年（1656）の堀ノ内村新切検地帳に塚穴として認められ、以後の寛文、元禄検地帳によっても、鬼ノ釜古墳が開口していたことがわかる。

2. 長野県教育委員会『農業振興開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書昭和45年度』による。

3. 2.に同じ

4. 柴田秀賓「北アルプスの花崗岩類」『地質学雑誌第60巻』1954による。

5. 須恵器部位名称及び成形・調整方法については、『陶邑古窯址群Ⅰ』に従った。

6. 古墳時代後期（6～7世紀代）は、土師器編年上、鬼高式土器の時期に相当する。したがって、鬼高式土器を出土する集落址が、鬼ノ釜古墳周辺の地域に存在することが推定されるわけで、既出土師器の検討とあわせて集落址の調査究明が今後必要となってくる。

引用参考文献（50音順）

池田町教育委員会編　『池田の文化財』　1972

大塚初重・小林三郎・下平秀夫　『信濃・長原古墳群』　長野県考古学会研究報告書5　長野県考古学会　1968

大場磐雄他　『信濃考古綜覧　第一巻上・下』　信濃史料刊行会　1956

倉田芳郎　「須恵器」　『新版考古学講座5　原史文化＜下＞』　雄山閣　1970

田辺昭三他　『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古学クラブ　1966

土屋長久編　『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』　1975

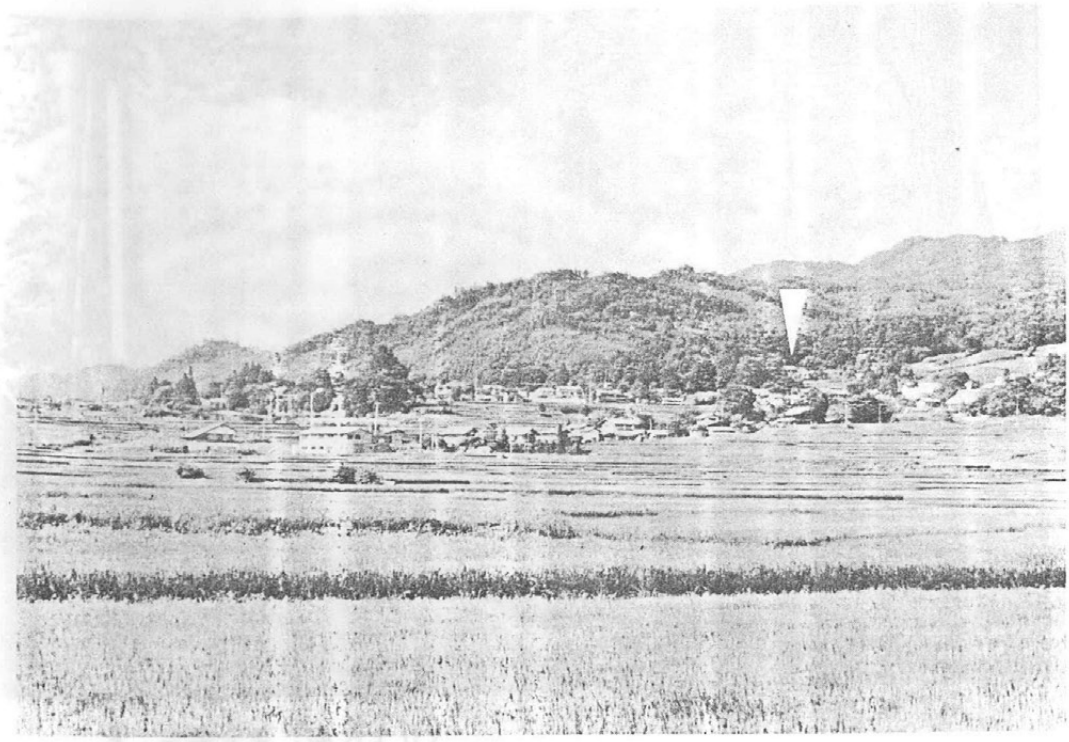
長野県教育委員会　『農業振興開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書昭和45年度』　1973

中村　浩他　『陶邑・深田』大阪府文化財センター　1973

仁科宗一郎　『安曇の古代－仁科濫觴記考－』　柳沢書苑刊　1972

藤森栄一　『古墳の地域的研究』　永井出版企画　1974

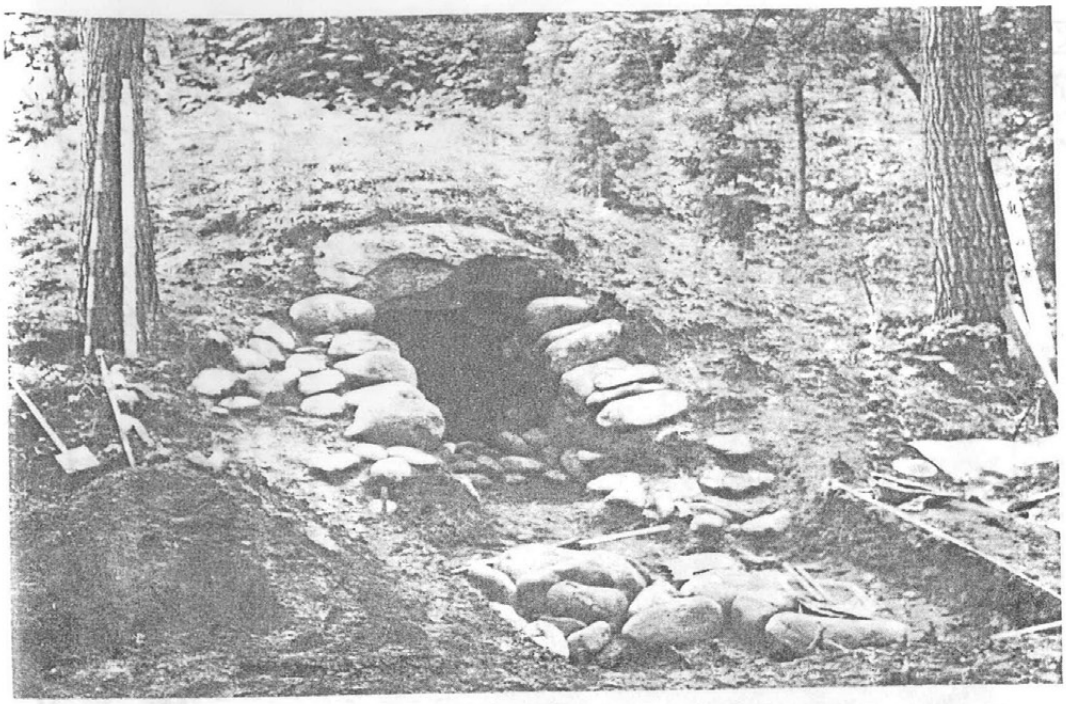
穂高町教育委員会編　『穂高町の古墳』　1970



1　古墳遠望（南方より）

2　古墳全景（東方より）

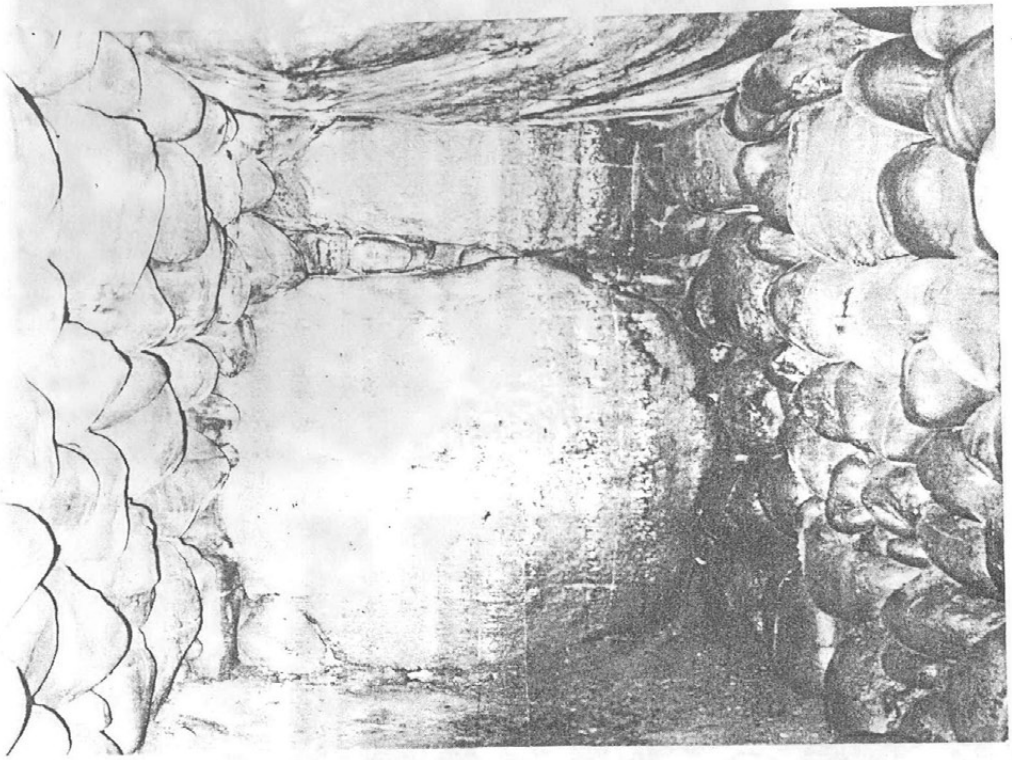
図版2



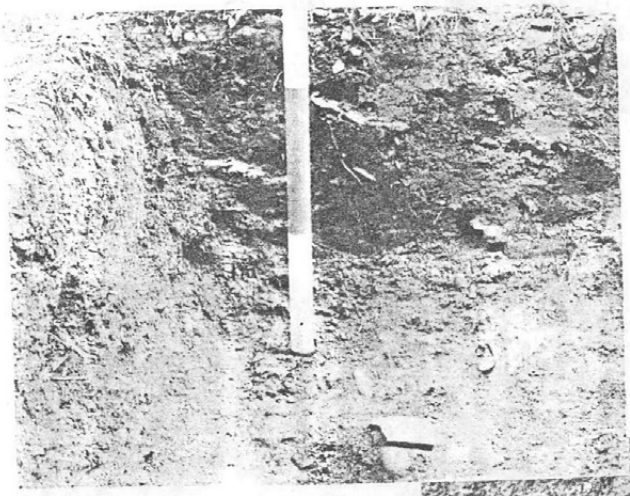
3　古墳全景（南方より）

4　石室入口部

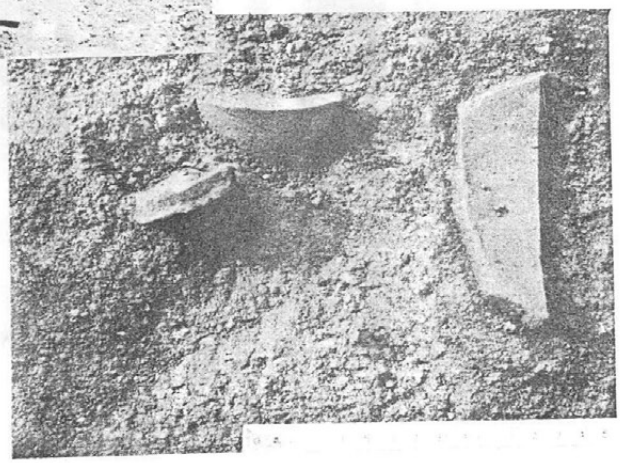
図版3



5　石室内部



6　須恵器出土状態(1)



7　須恵器出土状態(2)

図版4

8 慰霊鍬入れ式

9前庭部の調査

10 調査参加者